

2016.11.24 07:23

「新宮晋の宇宙船」展 風の彫刻家が現す「地球の呼吸」

風や水など自然エネルギーで動く彫刻で世界的に知られる彫刻家、新宮晋（すすむ）（79）。東日本の美術館で初となる個展「新宮晋の宇宙船」が、神奈川県横須賀美術館で開かれている。海を前にした美術館の庭や館内に置かれた彫刻は優雅に揺らめき、“地球の呼吸”を感じさせてくれる。（渋沢和彦）



美術館正面の「海の広場」に、高さ5メートルほどの彫刻がいくつも設置され、訪れる人たちを誘う。黄色い帆が風ではためき、明るくにぎやか。微風ならのんびりと、強風なら激しく、常に表情を変えていく。あくまでも風まかせだ。館内から見ると、海に浮かんでいる帆船のよう。



海を背景に設置された風で動く新宮晋の彫刻作品

美術館内にも風を利用した軽やかな彫刻がある。天井からつるされた「空のこだま」は、軽量の金属の軸と帆で構成。小さな帆がのんびりと揺らめき、無重力空間に迷い込んだような錯覚に陥る。空調や人が歩くかすかな風に反応するほど繊細で、目に見えない空気の流れを視覚で感じさせてくれる。

新宮は昭和12年、大阪に生まれ、東京芸大で油彩画を学んだ。風を意識した彫刻を始めたのは、ローマ国立美術学校に留学していたとき。普段は絵を描いていたが、あるとき立体作品を制作した。中が空洞になった軽い作品を野外で撮影しようとした際、風で動いてうまくいかなかった。その体験が風の彫刻へと目覚めさせた。以後、多くの作品を手掛け「風の彫刻家」と呼ばれるように。

平成12年から翌年にかけての1年半、「ウインドキャラバン」というプロジェクトを世界6カ所で展開。簡単なスチールの骨格にポリエステル布の風受け面を張った21点の彫刻を制作し、フィンランドの凍結した湖や強風が吹くモンゴルの平原など過酷な環境の中に置いた。各地に約1カ月間滞在し、現地の人たちとも交流。地球の神秘を感じ、自然に逆らわずに生きることの重要性を体験した。今回、「海の広場」に設置されたのはこのプロジェクトで使用したものだ。

新宮は水を動力とした作品も制作している。館内にある「雨の光線」は、金属の軸に取り付けられた筒状の受け皿が天井から落ちてくる水を受け止め、その重みで動き続ける。流線形のパーツの中を水が流れ回転する「小さな惑星」という作品もあり、ともに足元にあるプールの水を循環させていて、ざわめく水の音で雨の存在を感じる。

新宮は本展図録に「無限に広がる宇宙に存在する数えきれない星の中でも、色彩豊かで、様々な光や音が響き合う、とびっきりユニークな星、地球に、一人の人間としてボクは生まれた。これはどう考えても、奇跡としか言いようがない」との文章を寄せている。「宇宙船」という展覧会のタイトルは新宮が考えたという。

「風や水に恵まれている地球は宇宙の中で稀有（けう）な存在。地球を宇宙船にたとえ、もっと大切にしなければいけないとの思いが込められているのでは」と同館の沓沢耕介学芸員は話す。

新宮の作品は、“地球の呼吸”を感じとり、宙を舞い続ける。地球温暖化など環境が悪化している時代にあって、太陽や空気や水があることのありがたさを気付かせてくれる。



12月25日まで（12月5日休）。一般900円。問い合わせは同美術館（電）046・845・1211。